ドラブルの『氷河時代』

依　岡　道　子

Drabble's *The Ice Age*

Michiko YORIOKA

ドラブル（Margaret Drabble）の最新作『氷河時代』(*The Ice Age*)(1977) はこれまでの7篇の長篇小説と異なり，38才の男性の主人公が登場し構成の面からも作風の変化が見られる．

従来のドラブルの小説の特徴は風俗小説としてその主題の「日常性」にあった．しかし「日常性」と共にマイアー（V.G. Myer）の指摘するように，ドラブルのヒロイン達の意識の中にピューリタン的な「宗教性」が認められた．従来の作品ではロンドンの現代風俗と若い女性達の試行錯誤による成長過程が強く印象づけられ，主題として「宗教性」が特に注意を惹くことはなかった．*The Ice Age* では物語全体に及んで英国の現状と人々の苦痛に満ちた生活が描写されているが，その最後の場面で主人公が神への入信を告白し，その唐突さが読者を当惑させる．

ドラブルの作品の中には *The Millstone* (1965) や *Jerusalem the Golden* (1967) のように題名が聖書や讃美歌に由来する作品があり，更にヒロインの心理描写の中に 'justice', 'doom', 'guilt', 'innocence', 'vengeance' 等々の宗教的イメージを持つことばがしばしば見られる．

> I could not rid myself of the notion that if Octavia were to die, this would be a vengeance upon my sin. The innocent shall suffer for the guilty. What my sin had been I found difficult to determine, for I could not convince myself that sleeping with George had been a sin; on the contrary, in certain moods I tended to look on it as the only virtuous action of my life. A sense of retribution nevertheless hung heavily over me, and what I tried to preserve that night was faith not in God but in the laws of chance.[1)]

娘のオクタビアの手術に際して見せる *The Millstone* のヒロイン，ロザマンドの意識の中の神ということばは作品の主題として「宗教性」とは結び付かない．それは *Jerusalem the Golden* のヒロインの場合も同様である．クララはフランス旅行から帰国し，母の重態の知らせに"By willing her death, I have killed her. By taking her name in vain, I have killed her. She thought, let them tell me no more that we are free, we cannot draw a breath without guilt, for my freedom she dies."[2)] と自分の罪と母の病気とを結び付け心の動揺を示している．しかしそれはヒロイン達が潜在意識として puritan ethics の「禁欲性」を自ら認識し，それを乗り越える過程を示すものである．

The Ice Age に於ける主題とドラブルの新しい試みについて考えたい．

The Ice Age を従来の作品と比較するといくつかの相違点が挙げられる．第一に主人公は従来の若い知的な現代女性と違い，38才の男性アンソニー（Anthony Keating）である．次に小説の構成面では全体が50余のセクションに分割され，それが多数の脇役にも割り当てられてい

る．主題としては1960年代から1970年代前半の英国の社会状況，経済的変動が正面から捉えられている．

これらの新しい試みが相互に関連し，新しいタイプの小説として如何なる成果を収めるいるのであろうか．

従来の作品ではドラブル自身認めているように「日常性」は作品の基盤であり，ドラブルの特徴の一つである．若い才気活発なヒロインが因襲的で禁欲的人生に反撥し自分の手で現実に触れ現実開眼の過程を「日常性」の中で現代風俗として描写している．

この作品でも物語は日常生活の一場面から始まっている。1970年代の初め，主人公アンソニーが英国北部の田舎に新しい家を買い隠遁生活のような孤独な一人暮を始める．この時アンソニーは心臓病を煩い，仕事の面では会社が倒産同然である．田舎の生活は悠々自適で自由時間を持て余しているように見えるが，内面では難問を抱えて心の自由とは程遠い．

日常生活を基調とする主人公の言動の描写の中で家族・職業等々の経歴が伝達される．オクスフォード出身であるが，聖職にある父親の専門職についてほいしという願望を裏切り家を出る．他の作品のヒロインが地方の共同社会，中産階級の既製の価値観に反抗し，現実の社会で自分を見い出すのと同様，アンソニーも又中産階級の安定した聖職につき，安穏に暮す親に反抗したのであり，この主人公も，ヒロインが精神的成長を遂げるこれまでの作品の延長線上にあると言えよう．

アンソニーは大学在学中に結婚，コマーシャルを作り，作詞作曲をし，卒業後BBCやITVでproducing, writing, editing等の仕事に従事して一応の成功を収めた．しかし次の文章でわかるように未だ仕事に満足を感じていない． "So Anthony Keating expressed his dissatisfaction with himself and his life in a predictable manner; he changed his job."[3] 自分の仕事の必然性がつかめていないのであり，これは「自分は何者か」「自分の存在の意味は何か」というう実在の題に通じる．アメリカの学者ギンディン（ J. Gindin ）はその著作 *Postwar British Fiction* の中え "Identity and the Existential" という一章で，

> A great deal of contemporary fiction and drama confronts the problem of identity. Contemporary man is often involved in a search for his identity, and examination of the possible personal, social, religious, or doctrinal affiliations by means of which he can define himself.[4]

と述べている．どのような方法で自分の存在の意義を確認出来るかが問題である．アンソニーの場合は，"The vacant space was occupied by Len Wincobank: the conversion took place in 1968, while Anthony was watching unedited film of an interview with Len the property whizz kid."[5] のようにレンという経済界のやり手との出逢いにより，自力で土地開発を企画し大金を手に入れることで生甲斐を見出した．価値判断のよりどころを一応経済的な分野に見つけたが，同時に "Anthony had had God, along with his father and life in the cathedral close."[6] という描写に見られるように，conversionは言わば経済的信条（'economical creed'）へと為されたものの，彼の深部には「神」という宗教的信条（'religious creed'）の存在することを自ら認めている．

1970年代に入りジャイルズ達と始めた不動産会社は経済不況により倒産同然となる．60年代には英国も又他の先進諸国と同様，都市開発や国土開発に乗り出し，ビルや道路の建築により土地ブームが起った．アンソニーもそれに便乗し，不動産業を自分の新しい生甲斐として自信を持ち始めた．事業の好調はしばらく続くが，元来衰退途上の老国であるから好景気は一時的であった．70年代に入りオイルショックから直ちに不況を迎えた．その時の状況は "Now some

were bankrupt, some were in jail, some had comitted suicide, and only the biggest had survived unscathed."[7] と描写されているが，アンソニーは刑事事件に巻き込まれはしないが破産寸前の状態に陥り，自分の幻想に気付く．この点に於ては，他の作品のヒロイン達と同様人間成長過程の試行錯誤の状態を示すパターンと言える．

しかしこの作品では，作品の筋を人物達の相関関係の描写によって展開し，背景や様々の事件場面の裏づけで現実を生み出そうとする小説とは趣きを異にする．従来の作品に較べて脇役的人物が多数登場するが，彼らはマードック（Iris Murdoch）の小説のように人間関係の複雑さを開示したりそれに悩む人にではない．各人物間の関係は補足的であり，むしろ各人物と社会との関連を描写することにより背景となる社会状況が主題となっている．

登場人物達はこの主題を支える役割を与えられ，自分と社会との関連を語るが，その流れを円滑にし，物語としてまとめるのが主人公アンソニーの役目である．各自の抱えている問題を2,3挙げてみると，レン（Len Wincobank）はその非凡な経済的手腕によりアンソニーの尊敬を得ている人物であるが，やはり会社の倒産で失脚，刑に服している．刑務所での生活の描写や服役中の人々のことまで描写され，社会状況の深刻さを表わそうとしている．

アンソニーの新しい恋人アリソン（Alison Murray）も過去・現在の生活に幻滅を感じている人物である．離婚後二人の子供を抱え女優の道を断念する．娘の一人は脳性麻痺，もう一人は東欧の一国で交通事故を起し有罪となって刑務所にいる．

アリソンとレンがアンソニーにとって一番関係の深い人物であり，アンソニーとこの二人を中心にプロットが組み立てられている．

病める国の病める人々の問題をその他の多くの脇役達もそれぞれ提起している．彼らはアンソニーとの何らかの関係に於て登場するが，各自各様の精神的肉体的苦痛が描かれている．例えばキティー（Kitty Friedman）は IRA の無差別の爆発事件でその巻き添えにより夫の死，自分は片足切断という悲惨に逢う．更に若い女性で現代娘らしく割り切った物の考え方を見せる脇役モーリーン（Maureen Kirby）が居る．レンの秘書をしていたが会社の倒産により彼に見切りをつけ新しい職場で秘書として積極的に現状を乗り切って行く．彼女は中産階級出身ではなく working class から這い上り，自分の居場所を見つけ出している．モーリーンはドラブルのヒロイン達に共通した魅力，言わば精神的強靭さがある．先に見たキティーと共に経済的変動や政治的事件による影響を被り乍ら，私欲のないことや既製の倫理感に囚われることがなく自分の限界を知り，却って心の自由を得た人物として描かれている．"Maureen felt happy. The last year with Len had been a nightmare. She would forget it, she would meddle in such matter no longer, she would keep to her own limits."[8]

この作品に於ける作者の意図は英国の60年代から70年代という変動の一時期に注目し，その社会状況を物語風に仕立て，その状況を読者に認識させようとする事であろう．従って先づ状況が設定され，その後状況を伝えるのに適した人物が考案されたと思われる．先に述べたように人物間の複雑な人間関係や人物の微妙な心理の描写は見られない．

英国の社会状況が主題である時，作品の構成方法として54のセクションとその対位的描写の方法を利用している．「某月某日」のアンソニーの行動の描写に続き，時を同じくして他の人物の行動が描かれる．この方法は読者に混乱を起こさせることはない．第5作の *The Waterfall*（1969）でもセクションをいく分細分化しているが，一人称と三人称を交互に使用しヒロインの屈折する感情や意識を描き出そうと試みている．

Margaret Drabble makes no pretense of a single point of view; she prefers a cool, ranging comprehension of the entire English scenes.[9)]

これは *The Ice Age* に関する *The Yale Review* の書評の一部分である．視点の問題としては英国の状況を全体的に捉える為に三人称小説とし，視点を移動する「全知の視点」の方法をとっている．しかし多数の登場人物のエピソードからエピソードに移すことにより，小説にとって必要な緊張と緊張からの解放というリズムを産み出し得なかったと言える．

最も緊張感を与えるのは空港の騒動の場面である．アンソニーは危険を予感しながらもスパイの役を引き受け，政局不穏の Walachia へアリスンの娘ジェインを迎えに行く．結局，彼女を飛行機に乗せることに成功するが，自分は内乱に巻き込まれる．この事件は結末に導くために仕組まれた感が強く，現実味に乏しいとの批評もある．しかし空港での騒乱事件の場面は，作品のクライマックスとして必要なスリルをもたらすのに効果的であり，緊張感を与えている．

残る一つの問題は「宗教性」の扱い方である．アンソニーは反ワラキア政治運動とスパイの罪で六年の刑を宣告されて労働コロニーで働いている．彼はその収容所の中でボエチウスの『哲学の慰め』(*Consolations of Philosophy*) を読み，その後自らも本を書き始める．"His book is about the nature of God and the possibility of religious faith, . . ."[10)] 神への関心について次の様に描かれている．

He recognises that his interest in God may be due solely to his peculiar situation, and the number of times he has escaped death, unusual for a Briton in the nineteen seventies. He cannot evade the idea that God has given him the chance to work out the first causes and the last causes, and that he must not reject it. Those long winter days alone at High Rook House were a warning and a preparation.[11)]

"主体性のある円熟期の男性が，わずか数ケ月共産圏の収容所に入れられたぐらいで，自己の信念を変え，そう簡単に入信するものだろうか"[12)] という批評がある．確にそれを証者に納得させる客観的相関物が不足している．強いて見つけようとすれば，父の死後生家を訪れた時，彼が子供の頃過した大聖堂の辺りを散歩し，神の存在を身近に感じている．更に，ジェインを Walachia の刑務所に迎えに行く時に，アンソニーの意識にあったのは神であった．

Walking up the path towards the high white wire-topped walls of the prison, Anthony Keating found himself thinking, I do not how how man can do without God.

It was such an interesting concept that he stopped in the roadway, like Paul on the way to Damascus; not exactly felled by realisation, for alas, faith had not accompanied the concept. But it stopped him in his tracks, nevertheless. He stood there for a moment or two, and thought of all those who accept so readily the non-existence of God, who find such persuasive substitutes, such convincing alternative sanctions for their own efforts. Anthony had never been able to accept the humanist argument that man can behave well through his own manhood. Man clearly does not do so: that is that.[13)]

このようにアンソニーの神への関心の意外性を和らげる為に，アンソニーの内部にある神への何らかの意識が時々描写されている．この大転換は主人公が東欧の収容所で，今までの英国での生活と較べて，遥かに辛く生きる望みの薄い生活を体験し，人間の限界を痛感し更に神に感謝することによってもたらされたということになる．職業遍歴の間に抱いた「自分は何者か」という疑問を神への関心によって解決しようとしている．

ドラブルのヒロイン達の意識にみられるピューリタン的要素は「宗教性」というより「倫理性」として，人間形成の段階でマイナスの要素として作用していた．

この作品では，重要な結末の部分に於て神の出現で「宗教性」が一気に表面化し重要な意味を負わされている．ドラブルの特徴である「日常性」の描写の中で，アンソニーの言動を「実存的」に解釈して行くと，彼は聖職につく父親の安寧に反抗し，同時に existentialist の常として“自分が何を欲しているのか分らないままに自分に不満である．”[14] 試行錯誤の結果，収容所の不自由な生活の中で神の存在に気付くのである．ここで彼の抱いていた問題は本当は‘神が存在するか否か’ということではなかったかと推察される．宗教的信条への改宗によって identity の追求が終る．

小説の終りでめずらしい小鳥が収容所にやって来る．アンソニーにはそれが神の使者だと思える．

> Towards the end of his second year, as Anthony is sitting in a half hour's break from sawing wood, he sees a rare bird, a wonder, a bird that, as he knows from his book, rarely visits below the snow line, rarely visits the haunts of men, a secret beauty. It is a tree creeper. It perches, for a while, as Anthony watches, on the barbed wire of the high fence. It sits, and waits, then off it flies, its rounded little wings a brilliant red, beautiful, rare, dipping and leaping up, fluttering like a butterfly, for him alone. Off it will go, back to its rocky crevasses, up, high up in the mountains. But it has visited him. And it is alive. His heart rises. Perhaps it will come again. It is, he thinks, a messenger from God, an angel, a promise. I think these things because I am high on suffering, he tells himself, but nevertheless his heart rises, he experiences hope. He experiences joy. The bird will fly off, fluttering away its tiny life. There, we leave Anthony.[15]

アンソニーは心の自由を得ているし，将来の明るい希望も感じている．しかしこの結末は解決の方法としては理づめで，少し強引すぎる．英国の社会状況，経済的変動という大きなテーマに取り組み，読み物風に「日常性」の描写の中に「宗教性」という思想の問題処理をするのは難しいことであろう．主題と問題解決の仕方，それを扱う方法が十分に噛み合っていないと言える．

ドラブルの転換期とも考えられる *The Ice Age* に於て，小説家として社会問題を無視することが出来ず，新しい主題に取り組む意気込みを評価することが出来る．今後の方向としてジェイン・オースティン風の小説の伝統を継ぎ，「日常性」の描写に止まらず，その意味を問い直し，社会問題を正面から取り上げ，その思想面での展開を待ちたい．それは「現実」について書くのではない．ドラブルが「現実」をどのように捉えるかという知覚のあり方が重要である．

1. Drabble, Margaret: *The Millstone,* 146, Weidenfeld and Nicolson, London (1965)
2. Drabble, Margaret: *Jerusalem the Golden,* 208, Weidenfeld and Nicolson, London (1967)
3. Drabble, Margaret: *The Ice Age,* 27, Weidenfeld and Nicolson, London (1967)
4. Gindin, James: *Postwar British Fiction,* 226, Greenhood Press, Connecticut (1976)
5. Drabble: *op. cit.,* 27.
6. *Loc. cit.*
7. *Ibid.,* 14.

8. *Ibid.*, 230.
9. Ellmann, Mary: Seven Recent Novels, *The Yale Review*, 4, 592, Yale Univ., Connecticut, (1978)
10. Drabble: *op. cit.*, 295.
11. *Loc. cit.*
12. 井内雄四郎：自由への飛翔，現代イギリスの女流作家たち，220，評論社，東京（1979）
13. Drabble: *op. cit.*, 267.
14. コリン・ウィルソン，鈴木建三訳：小説のために，120，紀伊国屋書店，東京，(1977)
15. Drabble: *op. cit.*, 296-297.